

ペダルこぐ力で飲料水作り

自転車浄水器に注目

自転車の荷台に搭載し、ペダルをこいで飲料水をつくるユニークな浄水装置が注目を集めている。川崎市中原区の会社「日本ベリック」の製品で、東日本大震災後、災害時にも飲み水が確保できる防災用品として評判になり、問い合わせが相次いでいる。勝浦雄一社長(63)は「草の根レベルでものづくりの技術を役立

定年退職後、川崎で起業

てたい」と話している。浄水装置はホースが付いており、川などに入れて自転車のペダルをこぎ、水を吸い上げる。水は活性炭など3種のフィルターを通り、細菌や汚れを取り除いて飲み水になる仕組み。価格は1台55万円で、1時間で大人150人分の1日の飲料水300リットルがつくれるという。

勝浦社長は、以前勤務していた大手メーカーで、家庭用浄水器の事業責任者を務めていた。定年退職後、「どこにでも移動でき、電源不要の浄水器」の事業化を持ちかけられ、2005年5月に同社を設立。製造を東京都大田区の町工場に委託した。

これまで国内や発展途上国で約200台を販売。ミャンマーではサイクロンの被害を受けた農村や、きれいな水が必要な病院で活躍し、多くの人に喜ばれた。バン格拉デシュで昨年末に現地生産が始まったほか、インドでも生産を検討中という。

08年5月には、川崎市を訪問した中国の胡錦濤国家主席に阿部孝夫市長が1台を贈った。震災後は、プールや貯水槽といった水を蓄える設備を持つ学校やマンションなどから、約200件の問い合わせがあった。12月中旬に納入予定の国立長岡高専



サイクロンの被害を受けたミャンマーのトンティ村(ヤンゴンから車で1時間ほど)で、自転車搭載型浄水装置の水を飲む村人たち(2009年1月、日本ベリック提供)



自転車の荷台に搭載した人力浄水装置と勝浦社長(川崎市中原区で)

訪問した中国の胡錦濤国家主席に阿部孝夫市長が1台を贈った。震災後は、プールや貯水槽といった水を蓄える設備を持つ学校やマンションなどから、約200件の問い合わせがあった。12月中旬に納入予定の国立長岡高専

(新潟県長岡市)は、「新潟県中越地震では大きな被害が出た。約350人の寮生がおり、数日分の水を備蓄するのも大変で、学校周辺の沢の水を利用できると購入を決めた」と説明する。同社は、海水を淡水化する大型装置も開発。勝浦社長は「人口増などで世界的な水不足が見込まれるな

が、国際的な水ビジネスを展開したい」と、大きな目標を掲げている。